

生の自己創造性)の基礎的機能として位置付けられている。有機的プロセスの内的目的がプロセス自体によって決定されているのに対して、技術的生産の外的目的は決定されておらず、無限の可能性(自由と選択)に開かれている。しかし、このことが手段と目的の転倒を引き起こす。つまり、手段が可能であるというただそれだけの理由で、手段が目的化してしまう。そして、手段の生産が目的となり、技術は暴走する。こうした技術の両義性という深刻なジレンマを今日の我々の状況に引き寄せて例えるならば、原子力発電の功罪に表れていると言えよう。テイリッヒが指し示したように、あらゆる被造物の呻きを聞き、自然と精神が和解する新しい存在を望み、両義性を神律的に超克していく方途こそ、我々が歩むべき未来への第一歩となるのではないか。

「相関」という問題について

松田健三郎

テイリッヒはオットーを評する。『聖なるもの』の副題「神なもの」の理念に存する非合理なるもの、ならびに合理的なるものに対するその関係について、その後半に関しては、一連の未解決の問題が残されている、とりわけ神秘的なものと合理的形式とのあいだに存する本質的かわりを明示していないという。オットーによれば、「聖なるもの」とは複合理念であり、その作用原理として措定されるのが図式なのである。このよう

な「図式化」の関係が、聖なるものという複合理念における、合理的なものと非合理的なものとの関係である。この図式を、オットーはカントに依拠して提示する。カントは「時間的図式と因果のカテゴリーの結合」というが、オットーにおいては「カテゴリーと図式の結合の根拠」とはなにか。直接の説明も、カントの超越論的図式としての時間に相応するものもない。さて、カントの図式論に立ち返ってみると「図式論は最も難解な点の一つである。：わたしはこの章を最も重要な章のひとつであると考える」、さらには「我々の悟性のこの図式論は、人間の魂の深みに隠された技術である。そのコツをわれわれが自然からいつしか察知し、これを眼前に頭に提示することは難しいであろう」ともいわれる。この意味で、カントは「魂の深み」でアポリアに逢着し、「蹉跎」した。オットーの持ち出す「図式」が、カントの超越論的図式論に依拠するものであるなら、カントのアポリアと「蹉跎」も自身のものでもあろう。しかし、カントに相違して、オットーは「仮定」はすれども「措定」はせず、そこに原理的懸隔としての深遠を認めたのだった。シェーラーは、この方法は(純粹な方法としては)いわゆる否定神学の方法と根本において異なるものではないという。いみじくも、オットーは随所に神秘主義者を語り、かれらの沈黙としての饒舌、饒舌としての沈黙、その対象を areton (言い難いもの)と規定し、その言辞は「総合的な本質的な述語」であるという。その極として、パラドックス、アンチノミーをあげる。否定神学の方法であり、本質である。さて、「なぜこうしたことは遣いをするのか。なぜこのことは遣いが否定神学

のことは遣いに似ているのは偶然ではないのか」と問うのはデリダである。たとえば、「超義務としての義務」についていわれる。決定は下され、自らの責任はとるが、それは、現前化するあらゆる規定への関係を中断しながら、しかし、その中断とみずからが断ち切ったものとの現前化しうる関係を保ちながらでなくてはならない、いい換えれば、その規定を台無しにすることなく思考し、その縁をはみ出す（deborder）ような脱構築的系譜学のもとに、それを服せしめるよう命じることである、と。さらには、死についての知や人間・死学、生態学や形而上学、他方、死の実存論的分析論とのあいだの限界が、保証された縁（*bordure assurée*）であるかのようにもはや振舞うことはできない、いい換えれば還元不可能なまでの二重の包摂、すなわち包摂するものと包摂されるものとが諸々の縁の、あの奇妙なトポグラフィのなかで自らの位置を絶えず交換する。オットーの『聖なるもの』を評して、「明示していない」というテイリツヒは正しかったのだ。オットーには「ない」のだから。しかし、その「ない」は、いまデリダに確認されたことと、すなわち、自らの位置を絶えず交換する奇妙なトポグラフィをその可能態として秘め置くものであるのかもしれない。この可能態からオットー『聖なるもの』を読み返し、そこから、テイリツヒの批評を裏打ちしている「相関」の問題を照射していくとき、見えてくるもの、隠蔽しつつ露呈してくるであろうもの待ちたい（*sattendre*）。

このものは、そこに現前しているか、あるいは現前していない。このものは突破するか、あるいは突破していない。

…それは理性的領域の彼方に存在する根源的所与なのである。しかもなおこのものは、この領域へのかかわりなしにはありえない。（テイリツヒ）

宗教的實在論と象徴

——波多野とテイリツヒ——

芦名定道

近代以降の世界において、キリスト教をはじめとした諸宗教は様々な問いや批判に晒されてきた（宗教は欲望の投影である、イデオロギーに過ぎないなど）。近代人は宗教を卒業した（あるいはすべきである）と言われて、すでに久しい年月が経過した。この問題状況こそが、現代において宗教哲学を論じる前提であることを確認しなければならない。

本発表では、以上を念頭に置きながら、宗教経験の事実性という視点から宗教哲学の可能性を論じてみたい。そのために参照されるのは、「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようななければならないか」という視点から構築されたロイ・バスカの科学哲学であるが、本発表では、カント批判哲学以降の思想状況における宗教的實在論の問題に対して、象徴論からの接近が試みられる。そのために、取り上げられるのが、テイリツヒと波多野の古典的な宗教哲学である。

まず、テイリツヒの象徴論と神話論を概観しよう。テイリツヒの象徴論は、一九二〇年代から五〇年代へと至る過程で様々な変遷を示しつつも、意味論（多義性、指示機能）、形態論（言